

〈特集〉

色覚多様性 ～保育・子育て支援に求められること (その2)

しきかく学習カラーメイト **ごとう あさほ**

田 出会い

小学校教員の私は、2001年に大分県同和教育研究協議会事務局へ派遣され、そこで尾家宏昭（前号執筆者）に出会いました。彼は当時「教員向けの色覚に関する学習資料」を作成中で、私はそれを手伝うことになりました。子どもの頃に受けた色覚検査と「色覚異常」という言葉をなんとなく記憶していました。

初めは「どう見えているのだろうか?」「どのような配慮が必要なのだろうか?」と質問したい気持ちでいっぱいでしたが、「色覚検査を行い、診断することが実は人権問題につながっている」と言われた時、それを口から出すことはできませんでした。

尾家と話を重ねていくにつれ、少しずつ理解できてきました。例えば、車の運転中に渋滞情報を示す電光掲示板を見た私が「オレンジ色なので、少し混んでいますね」と話しかけると、「え、電光掲示板の色ってちがうん?」と返ってきました。「ふだんは黄緑色で、少し混むとオレンジ色になり、渋滞すると赤色になりますよ」と説明すると、「全部同じ色かと思ってた」と笑っていました。「同じ色に見えるなら、どの色に見えるのだろうか?」という疑問が頭に浮かびましたが、その質問では理解し合えないことに気づきました。仮に「黄緑色に見える」と答えられても、私が見えている黄緑色と同じかどうか判断するすべはありません。色の名前を尋ねても質問は成り立たないのです。また、わたしたちの身の回りの標示物は多数色覚者の見分けやすいデザインで作られているため、少数色覚者には判別が難しい場合もあるのだと分かりました。

その後、「学習資料」作成に関わる中で、私と感じ方のちがう色についてもなんとなく想像できるようになりました。「色覚異常」という言葉から受けていたイメージが、少しずつ私の中で理解ができ、それが深まっていったように思います。

田 少数色覚の子ども?

私は大学卒業後、初めは高等学校で、次に中学校で、

英語を教えた経験があります。これまで小1から高3までの子どもたちの成長に関わったことは、とても貴重な経験となっています。

小4担任のとき、図工の時間に、ある子どもが「できた!」と言って絵を見せにきました。友だちを描いたその絵は違和感のある暗い配色で塗られていました。かすれた塗り方で塗り残しも多く、完成には程遠く感じられたのですが、「この子は、もしかしたら少数色覚の子どもなのかもしれない」と思い、「少しでも色を塗る楽しさを感じてもらえたら」と、パレットをきれいに拭き、どんな色に塗りたいかを尋ねました。混色の配合や水分量を一緒に確かめながら色を作ると、その子は丁寧に塗り始めました。友だちからも「その色いいね」など褒められ、うれしそうでした。

田 絵本『ERIK the RED sees GREEN』の翻訳

前号で述べた「しきかく学習カラーメイト」は2016年に発足しました。「色覚検査の再開」に際し、子どもたちに色覚のちがいを正しく知ってもらうための啓発誌を作成したいという尾家の思いを聞き、活動に参加しました。

マンガ2冊の発刊後、彼からアメリカの絵本『ERIK the RED sees GREEN -A Story about color blindness-』を日本の子どもたちにも読んでほしい、



その翻訳をあなたに頼みたいと言われ驚き、「このような大切な絵本は翻訳家に依頼した方がいいですよ」と応えていました。自分が絵本を翻訳するなど考えられませんでした。しかし数ヶ月後、「小学校の先生のあなた

に翻訳してほしい」と言われたとき、小学校教員として目の前の子どもたちにどんな言葉で伝えたいかを考えればよいのだと理解しました。そのとき、読み聞かせを楽しむ子どもたちのキラキラした目を思い出し、私は挑戦することにしました。

田 私の一歩

私は小さい頃から失敗を恐れる性格でした。早生まれということも重なり、「みんなはどう思っているのだろう？ どうしてるのかな？」と周りを気にして、時には「自分の方が間違えてたんだ」と思い込み、だんだん自分の意見が言えなくなっていました。同時に自尊感情も低くなっていきました。

大学生のとき、英語が話せるようになりたいと思い、イギリスに留学しました。授業で堂々と意見を発表できる現地の学生たちを見て、自分も意見を言えるようになりたいと強く思いました。

ある時、授業で明らかに場違いな発言をした学生がいました。ほんの一瞬だけ時間が止まりましたが、『あなたはそう思うのね』という雰囲気ですらって次の意見が提案されて話題が変わりました。主張することが評価される欧米文化での思いやりを感じました。

日本では協調性が重んじられます。「出る杭は打たれる」という諺に対し「出すぎる杭は打たれない」という切り返しを聞いて、なるほど「出すぎる」ほどやってみようかと納得したこともありました。しかし今は、「出すぎる杭」という発想ではなく、その人のそのままをみんなが自然に受け入れられる社会になればいいと思うようになっています。

「知らない国に飛び込んだ」という経験から、「勇気を出して一歩踏み出してみよう」と思うことが増えたように思います。その中でも、翻訳の挑戦は、大きな一歩でした。

田 『絵本』からの気づきと学び

主人公のエリックは小学校2年生くらいで、原文ではワンダフルな子どもと紹介されています。そして、エリックはとても知りたがり屋です。エリックの知りたいという気持ちがこのお話の根底にあり、家族や友だち、先生たちも一緒に少数色覚者エリックとうまく過ごせる方法を見つけしていくワンダフルなストーリーです。翻訳する中で次のようなことを感じました。

● 挿し絵の中の工夫

尾家と翻訳文について話す中で、挿し絵の色づかいはとても注意を払って描かれていることにお互い気づきました。例えば、サッカーやバスケのピブス



の色は、少数色覚者が混同する配色と、見分けられる配色が明確に示されています。それぞれの見え方を口にするすることで、相手の見え方がより分かるようになりました。

また、中扉に書かれたタイトルの「RED」と「GREEN」という文字は、それぞれ赤っぽい色と緑っぽい色でかかれていますが、よく見ると同系色だということに気づきました。尾家もすぐには気づかず、注視すればちがうことが分かると言いました。ここでも、少数色覚者の色混同をうまく表現しているのです。つまり、この絵本は、多数色覚者と少数色覚者同士が色覚のちがいを理解し合うのにとっても役立つ教材にもなるのです。

● 日本とのちがい

お話では、色で失敗をしたエリックは、友だちから「あなたカラーブラインドね」と言われ眼科を受診します。そこで、医師から問題を回避するための「いい方法」を聞きます。一方で、現在日本で行われている色覚検査は、小学校時に「色覚異常」を自覚させ、眼科医が就くべきでないとする職業を伝えるための「色盲検査（前号参照）」で「いい方法」は聞けないようです。

なぜこんなにちがうのでしょうか。エリックの学級には、肌の色や髪の色など、さまざまなちがいのある子どもたちが一緒に学んでいるため、ちがいを受け入れやすいのでしょうか。そんなことはないでしょう。日本の学校の子どもたちにも、さまざまなちがいがあります。ふだん見過ごしているかもしれませんが、人はそれぞれちがいがあること、そのちがいを認め合うことがとてもすてきなことだと、改めて教えてもらった気がしました。

● この絵本に込めた願い

物語のラストでエリックが発した言葉は、原作者

が伝えなかったことをいろいろな角度から考え、和訳にとても時間がかかりました。読まれた方それぞれの捉え方が出てくるかもしれませんが、それを伝え合えば、きっとエリックの思いや願いにつながっていくでしょう。

翻訳は、ふだん問題とっていないことを考える機会となり、深い学びの場となりました。色覚に限らず、いろいろなちがいが自然に受け入れられ、もっと気軽に話せるようになればどんなにすばらしいだろうと感じ、そうした社会になりますようにと、いつしか私は、絵本に願いを込めていました。

田 小学校教員として思うこと

少数色覚の子どもは、きっと皆さんの身近にいます。日常生活の中で困ることもあまりなく、周囲が気づくこともほとんどありません。本人が気づかないことも多いようです。ただ、前述の電光掲示板のように多数色覚者だけを想定して考えられた色づかいで作られたものの中には、「困ること」もあります。その「困ること」の原因を少数色覚(者)に求めるべきではないことにみんなが早く気づいてほしいと思っています。

つまり、子どもたちに接する大人が、まず少数色覚やそれに伴う人権問題(色覚問題)に対する正しい知識をもった上で、困った場合に必要なサポートや事前の配慮ができることが必要だと、わたしたちは考えます。これこそ、人それぞれの「ちがい」に優劣をつけない社会に欠かすことのできないことだと思うのです。

保育・子育て支援の場でも、すべての子どもたちが「ちがい」をマイナスに捉えることなく、自尊感情もてるような工夫が望まれます。小学校時代の尾家のような「色を見分けられないから…」という負の出会いや、「この職業には就けない」と言われる絶望感をもたせてはいけません。涙を流す母親をこれ以上生み出してはいけません。

自分の色覚のことを「ちょっと変わった色覚」と肯定的に捉え、友だちに説明するエリックや、一緒に「いい方法」を実践するエリックの学校の人たちのように、ちがいをみんなで理解していく子どもたちの場づくりを保育・子育て支援からすべての学校現場につなげていくことがとても重要だと思われま。そこはきっと、自分の思いを自由に伝えること

ができ、お互いそれを受け入れる、笑顔あふれる場になるのではないのでしょうか。

田 子どもと一緒に読んでほしい

小学生は読み聞かせが大好きです。保護者や地域ボランティアが読み聞かせに来校する学校も多いと聞きます。私の勤めたどの小学校でも、読み聞かせの時間は笑顔あふれる場になっていました。

読み聞かせの後、私は子どもたちに感想を一言発表してもらうことにしています。最初はなかなか言えませんが、「それは大切だね」「そんな考え方もあるんだね」「いいところに気づいたね」など、私が受け止めると、発表できる子どもたちが増えていきました。

また、発表までではできなくてもうなずきながら聞いたり、「私もそう思った」と付け加えたりして、温かい雰囲気になりました。読み聞かせの時間を「安心して楽しみ、認め合える場」にすれば、お互いに尊重し合う土作りになると思います。

『ERIK the RED sees GREEN』は、アメリカの家庭で未就学の子どもに読み聞かせをして、この本が子どものお気に入りになったというレビュー(評価)もたくさんあります。読み聞かせであれば、小学校のイメージがもてない子どもにも、学校生活に期待をもたせながらお話できます。ぜひ、小さい頃から子どもたちに夢や希望もてる絵本をたくさん読んで、子どもたちと一緒に何かを感じてほしいです。

その1冊が『エリックの赤・緑』だと、とてもうれしく思います。



原作 Julie Anderson
David López

翻訳 ごとう あさほ

色と色の感じ方のちがいは
尾家 宏昭

ISBN 978-4-910415-59-8

税込 2,750円

「しきかく学習カラーメイト」
で検索



ごとう あさほ

小学校の教員。「しきかく学習カラーメイト」に発足当時から参加、『はじめて色覚にであう本』『検査のまえによむ色覚の本』発刊に関わる。『エリックの赤・緑』では、アメリカ版原作の翻訳を担当した。